



[IMG 4166-001](#)

山本剛さん

テレビ朝日の番組ごほんジャパンで「タケノコづくりの匠」と紹介された南伊豆町一條の山本剛(ごう)さん77歳は絶品タケノコの生産のみならず、誰からも「南伊豆が日本一の竹林の里」と呼ばれるようにしたいとチャレンジを続けておられます。山本さんのタケノコの美味さの秘密は飽くなき探求心と有機にこだわった土づくりです。



[ポラス竹炭](#)



[ポラス竹炭2](#)

ポラス竹炭づくりの様子

山本さんは間伐した竹の処分を兼ね、伐採現場で竹炭にする方法を開発、多孔質の炭が出来ることからポラス竹炭と名付けました。この竹炭はミネラル分が多く多孔質で柔らかいので土との馴染みが良く、微生物の繁殖も活発になり、出来た竹炭をその場で撒けば竹が元気に育ちます。また、余分な竹をチップにして竹林に撒くと有機質にとんだ土壌になります。



[孟宗竹3](#)

孟宗竹

皆さんタケノコの種類をどれくらいご存知ですか？孟宗竹とそのタケノコは直ぐに思い浮かびますよね。旬の季節は四月、掘り立ての柔らかいタケノコは好きな人にはこたえられない美味しさですね。そして、タケノコはヌカを入れて茹でてアクを抜くもの、地上に出てしまったものはもう駄目と思い込んでいませんか？



[takenoko](#)



[hosakitakenoko](#)

穂先タケノコ

しかし、そうではないタケノコが色々あることは余り知られていません。山本さんが一番美味しいと思うのは穂先タケノコだと言います。孟宗竹が2~3mに育ったところその先端1m程度を食べる穂先タケノコは5月が旬、簡単に収穫出来、しかもアク抜き不要かつ抜群に美味しそうです。



[IMG 4184](#)

雷竹

日本では馴染みがないものの中国では高級食材なのは雷竹です。通常の旬は3~4月ですが、早出し栽培だと11月頃から収穫が可能で中国ではお正月を祝う大切なタケノコとのこと。



[雷竹3](#)



[270px-W hatiku3051](#)



[IMG 4157](#)

ハチク ハナタケの手入れをする山本さん
アクが少なく歯切れの良さと独特の風味で知る人ぞ知るハチク。一般的な孟宗竹のタケノコの旬は4月ですが、ハチクの旬はその直後の5～6月である為やや影が薄くなっているようです。



[四方竹2](#)



[四方竹](#)

秋のタケノコ四方竹
観賞用として人気のある四方竹、何と収穫は秋です。地上に30cm伸びてきたものを「ぼん」と折るだけ。断面が四角い事が特徴でアク抜きが必要ですが、コリッとした食感が人気です。



[IMG 2589](#)



[IMG 4199竹林の里](#)

一条の竹林と里山
山本さんはこの他、真竹、緑竹など6種類のタケノコを販売、その他6種類の竹を試作しているそうです。

一年を通して色々なタケノコを楽しめる里、竹を堆肥、肥料、燃料としてフルに活用する里、竹と言えば南伊豆と言われる「日本一の竹林の里」にすることが目標です。



[荒れた竹藪](#)

放置された竹林

竹は邪魔者と言うのが今の日本の常識ですが上手に活用すれば宝に変わると言います。放置された竹藪は写真のように古くなった竹が倒れ、中に入ることも難しく、猪やシカなどの害獣が跋扈する世界になります。傘をさしても悠々と歩けるほどに整備された美しい竹林は害獣対策になるだけでなく美味しいタケノコや様々な恵みをもたらしてくれます。山本さんは「竹は繁殖力が極めて旺盛であり、その繊維を活かした布、紙の原料となり、また燃料あるいは土壌改良資材となる優れた資源である。ナノセルロースなど新たな用途への研究を進め里山の宝としたい。一方的に工業製品を輸出し農業製品などを輸入する時代は終わった。高齢化の進展と共に諦めムードが漂い始めている今、これまでの常識を見直して、一旦失った物を取り戻すべき時代に来ている。」と訴えられます。



[DSC 0081竹の子村](#)

竹の子村とたけ炭ひろば

山本さんが産まれた頃、南伊豆一条の産業は林業、炭焼き、養蚕でした。山本さんの家は製糸工場をしていましたが、その後生糸が売れなくなり周りの桑畑はミカンや竹林に変わりました。33歳の時、勤めをやめて家業を継いだ昭和40年代に農水省は観光農業に力を入れ始めたこともあり、日本で初めて、タケノコ狩りが出来る「一条竹の子村」を村の仲間6人とオープンしました。竹の子村は今でも南伊豆観光の目玉の一つです。

山本さんは農閑期の楽しみに竹炭を焼いていましたが、やがて竹炭ブームが起こり「みなみいず たけ炭ひろば」をオープン、一時は連日竹炭を焼く日が続きました。ブームは去りましたが、ここ4年間は国の補助を得て竹林整備事業を行い来年度も申請中です。そしてつい昨年にも竹炭や竹チップを使って、効果の非常に高い有機肥料を製造する作業場を新築しました。山本さんの挑戦はまだ続きます。

取材：生きがい特派員賀茂地区担当 福居通彦



[IMG 4186](#)